

#### (4) (山の危険)

深田久弥は山の危険についてどう考えていたのか、どのように述べているのだろう。人気があり影響力が大きいだけに注目される。

深田久弥は「日本百名山」の「谷川岳」の項で、「今日まで谷川岳で遭難死亡した人は二百数十名に及ぶという。そしてなおあとを絶たない。この不幸な数字は世界のどこの山にも類がない」と、即ち谷川岳は世界一遭難死亡者を出している汚名高き山と数字を挙げて言及しているが、登山の危険性について「注意」や「忠告」らしきことは片言隻句も記していないのである。この本の執筆当時、今程多くの登山愛好家に読まれるとは想像していなかったとしても、この項で安全な登山について一言所見を述べておくことが山の文学者たる著者の倫理ではないかと思う。そうすれば遭難抑制の効果は少なからずあったと思うからである。

深田久弥は「深田久弥の山さまざま」の「夏山へのいざない」の項で「山は危険だという古い観念が抜けきらないんだな。山はちっとも危険じゃない。登山には困難は伴うが危険はない、というのが僕の説だ。…人々はその困難を危険と取り違えている。危険はあらゆる方法で避けるのが登山の本道です。…そうしたらもはや危険はなく、ただ打ち克って行くのが無上の快樂である困難があるだけです。」と言っているし、昭和40年7月朝日新聞の随筆「遭難」の中で、「人が山で遭難するとみんな「あたら命を」というが、私は山が好きだから、あたら命などと考えたことはない。悼む心はあっても、残念だとは思わない。

…永遠の臥床(ふしど)とするにはいい場所だ。もしも私が山で死んだら、そんなふうに思っていたきたい。ゆめゆめ惜しい男を、などと言ってほしくない」と記している(「日本百名山と深田久弥」の「登山の怖さ」の項より)。「ゆめゆめ惜しい男を、などと言ってほしくない」とは男気の格好をつけた口舌であろうが、「山はちっとも危険じゃない」と言っていることと共に、素直にそのまま受け取れない。

深田久弥自身、大正15年5月に友人と3人で八ヶ岳の硫黄岳で遭難し、一人の友人を失っている。この遭難死について、「日本百名山」の「八ヶ岳」の項で「そのすぐあとに友の墜落死というカタストロフィーがあった。今でも海ノ口あたりから眺めると友の最後の場であった硫黄岳北面の岩壁が痛ましく私の



夏の硫黄岳

目を打ってくる」と、友の悲劇に触れている。友の悲劇は生き残った深田久弥にとっても悲劇ではないのか。こんな悲劇を体験しておりながら、後年「山はちっとも危険じゃない」とよく言えると思う。本音はどうであろうとも、この言い方は軽薄この上ない。何故、「いくら安全を期しても潜在的な危険を伴う」「危険が潜んでいる」くらいのことを言えなかったのか。

深田久弥は登山中に、脳卒中で死亡したが、遭難原因の中に道迷いや滑落と共に持病悪化も入っていることから、脳卒中の死亡も遭難死の範疇に入ると言えよう。「日本百名山と深田久弥」の「医者嫌い」の項で、深田久弥は51才の時に「中学5年の夏、腸チフスをしたほかに、医者に手くびを握られたおぼえがない」「私は医者がきらいだし。医者のことなどあまり信用しないから、健康診断や血圧など計ってもらったことがない」と記し、健康について自信の程を語っている。酒が大好きなのに健康診断を受け

なかったというのは、少しコジツケのようで気がひけるが、「危険はあらゆる方法で避けるのが登山の本道です」に悖ることではないか。先ず健康、そして登山である。

谷川岳での遭難死者数は、統計が取られた昭和6年から平成24年までの82年間で805名に達するという。この数字を知れば、深田久弥は改めて何と言うだろうか。それでも「山はちっとも危険じゃない」と言うのだろうか。多くの著名登山家が遭難死しているが、その名簿を作ってみればその多さに改めて驚愕するはずだ。登山用具店の前にその名簿を貼り出すようなことは愚の骨頂であるが、そんな名簿を一瞥してみたい気もする。

#### (5) (訓言)、(山の本)、(こころの山)

深田久弥は「名もなき山へ」の「未知を求めよ」の項で「未知の道に不安と危険が伴うのは当然である。それを恐れているのは、何ごともなし得ない。ボイズ、ビー、アドベンチャラス！（青年よ、冒険的であれ！）と私は叫びたい。人間はいつの時代でも「あの山の向うは？」という強い好奇心を持っている。そして、それを知ろうとして勇敢に出かけるのは、冒険的精神である。どこの民族でも国家でも一番栄えた時代は、この精神の旺盛な時であった」また「旅行に出るといつも私は自分に言い聞かせる好きな言葉がある。「われ道の長く険しきを愛する」それは人生行路にも必要な訓言であろう。安易な道を行こうとするのは、心のゆるんだ時である」と記している。聖書の箴言のような含蓄のある言葉である。深田久弥が火宅の人生行路に舵をきったのは、この訓言を胸に秘めていたからなのか。

深田久弥は「深田久弥の山さまざま」の「山の本」の項で「われわれ山岳愛好者は、山登りを他の一般スポーツと同一視されたくない気持がある。

…もっと精神的なものが登山には含まれている。その証拠には山の本である」と述べ、山の本は多い上に「古典として百年の生命」をもつものがある事実を指摘し、「山登りをはもちろん実践も大事であるが、しかし又書物だけでも十分に楽しめる趣味である。イギリス人の登山家ヤングも言っている。「私が山岳人と言うのは、山に登るだけを指すのではない。歩くことが好きで、山について読みまたは思索することの好きな人は、誰でも山岳人と言うのである」としている」と記している。山登りには、精神的なものがあり、山の本の古典もあるという指摘には賛成する。他方で、山登りほどに危険を伴うような一般スポーツは他にないということも事実であるが、ここでは伏せておくことにしよう。

深田久弥は「深田久弥の山さまざま」の「ふるさとの山」の項で「人はそれぞれ、こころの山を持っている、と言ったら気障に聞こえるだろうか。幼い時から無心に朝夕仰いでいた山が、その人の性格に何らかの影響を与えないことがあろうか。私にはその山は白山であった」と記している。「こころの山」とは美しい言葉であり、好きだ。昔は日本中どこに住んでいても、どちらかの方角に何らかの山影が見えた。東京からは富士山や筑波山が見えた。かつて坂歩きに凝った時、富士見のつく坂や地名が多いのを実感した。

自分のこころの山を強いて挙げるなら、大阪府と奈良県境の低山、生駒山(642m)である。小学生の頃大阪市内にもまだ畑や田圃がかなり残っていて、天気の良い日には生駒山の山稜を長く望むことができた。山麓には「野崎詣りは屋形船で詣ろう…どこを向いても菜の花盛り…」と歌われた野崎観音があった。探険と称して小学生仲間と生駒山を目指して遠征した。住宅街から畑や田圃に入り、農道、畦道、国道を歩き、水路を渡り、生駒山を目標に東に向かってガムシャラに歩き、田舎の景色を満喫して夕方には戻るのである。山に登ることはなく、ガムシャラに歩くだけである。菜の花は咲いていたが、屋形船

は既になかった。何か影響を受けたとも思わないが、こころの山はと訊かれれば、生駒山ということになる。その後、開発が進むと建物の陰になってその山も見えなくなり日常から消えていった。その後も登ったことはない。

(おわり)

#### 参考資料

「日本百名山」深田久弥著 新潮文庫 750 昭和 53 年 11 月刊

「名もなき山へ」深田久弥著 幻戯書房 2014 年 9 月刊

「深田久弥の山さまざま」池内紀 編・解説 五月書房 1996 年 9 月刊

「日本百名山と深田久弥」高辻謙輔著 自由書房 2004 年 11 月刊

「日本百名山の背景 深田久弥の二つの愛」安宅夏夫著 集英社新書 2002 年 4 月刊

「百名山の人 深田久弥伝」田沢拓也著 角川文庫のウェブサイト

ウィキペディアの「深田久弥」

「山の社会学・菊地俊朗著文春新書 175 2001 年 6 月刊